

unbewegliche, verdoppelte, frumme,
 gerade, geschliffene, gestoffene,
 mit Pausen vorne und hinten, ober &c.
 mit Bindungen, oder &c.
 Oder mit 3. Stimmen: * &c.

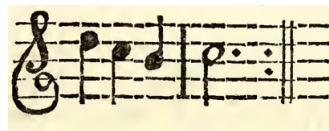
もし全ての種類と変化について具体的な事例を書くとしたら、君はそれを持ち帰るのに馬車が一台いるかもしれない。確かに、これまで作ってきた例も、これから作る例も、いろいろな意味で逆転の発想ができるのではないか。つまり一つから、世界に存在する木と草の数の何百倍、時には千倍ものヴァリエーションが可能である。

- D.: 君はなぜそれぞれの例にその説明をしないのか？
- P.: そうするとたくさん書かなければならない。ただよろしければ、このような多少の変化が可能箇所
 に◎という印を使ってみよう。(13頁)そして第二章、音の秩序について終わった段階でいずれにしても、君がどのように一日で百以上の主題²³ (Themata) を発想することができるか、教える予定である。
- D.: これは大変喜んで信じたい。しかし、今はちょっと別のことを聞きたい。君が上にカデンツについて、それが上昇と下降の法則に従わないと教えてくれたが、それを考えれば終わるのは低い音でもこのように

²³ 著者注 Thema, Entwurf / それを元に楽曲全体が作られる。



高い音でも



同じだね。

P: 間違いなく。しかしこのような三度カデンツ (Terz-Cadenzen) は、第二部でよりも第一部で聞きたい。

D: なぜ君はそれを三度カデンツと呼ぶのか？

P: 終止音の前の音符が低音 (バス) と三度関係にあるからだ、下の例を見よ。



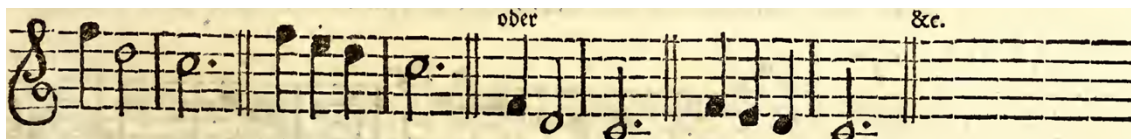
あるいは (今は一応²⁴三度と十度を同一のものとして扱うので) 低い音域で、例えば



多くの人がそれを不完全なカデンツとも呼ぶ、そしてそれが楽曲の終了として聴覚を完全に落ち着かせることができないう。従ってその後に完全な、つまり五度カデンツがその後に付け足されることも多い、例えば²⁵



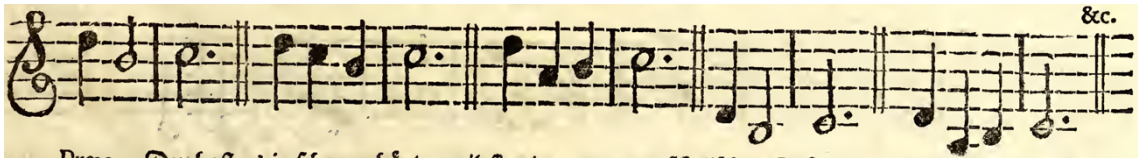
D: つまりこのようなものは五度または完全なカデンツと呼ばれるんでね。



しかしそうすると、なぜ次のようなものは不完全だとされるのだろうか。

²⁴ 著者注 後で低音 (Baß) についての章でもっとこれについて書く機会があるだろうから。

²⁵ 訳者注 次の譜例では、三回「unvollk.」(unvollkommen, 不完全) と書かれていますが、3回目はミスプリントだと思われる。「vollk.」(vollkommen, 完全) が正しいだろう。



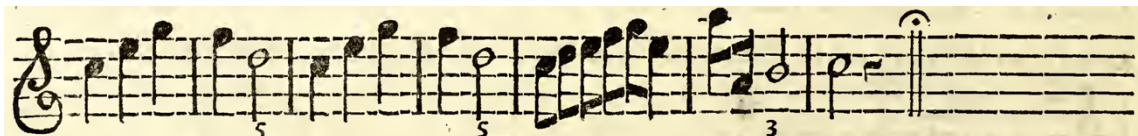
P: それをさっき言ったはずだ、曲全体を完全に締めくくりはしないから。内声だけに使われる場合も多い、例えば

(14頁)



D: 今ははっきりと見えてきた、なぜ一方を五度カデンツ、他方を三度カデンツと呼ぶのか。つまり低音のGから上に上がって数えると、第二ヴァイオリンのB dur²⁶またはHが三番目の音符²⁷で、同じく第一ヴァイオリンのDが五番目の音符、言い換えれば五度である。

P: それについてはまた別の機会により網羅的に論じよう。ちなみに不完全なカデンツが独立して、つまり五度カデンツを伴わずに、も非常によく使われる。そのみならず、一つ又は複数の五度カデンツの後に三度カデンツがくると、多くの聞き手は後者を前者よりも完全だと感じる。小さな一例のみをあげよう。



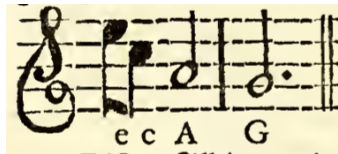
D: 少なくとも変化させるにはときどき使えそうだ、どんな調においても、だろう？

P: その通り。ここで一つ言わなければならない。これを覚えなさい。カデンツはドイツ語で Fall²⁸ (訳者注 「落下」という意味)、終止音または休止音へあたかも落下するようであるから、例えば

²⁶ 訳者注 現代のドイツ語ではB durは「変ロ長調」という意味であるが、ここでは「ロ音」という意味である。この用法は中世のラテン語文献に由来している。ラテン語ではB durum (「固いB」)は「ロ音」、B molle (「柔らかいB」)は「変ロ音」を指す。Bという文字を「固く」(丸い線ではなく角がある線)書くことから、その形に似たHがロ音を指す文字としてドイツ語の音楽用語として定着した。この著作では両方の名称が並んでいるから、当時ではこの二つの呼び名が併用されたと知ることができる。

²⁷ 著者注 Tertia nota (ラテン語：三番目の音符) , die Terz (ドイツ語：三度) .

²⁸ 著者注 「落ちる」から、イタリア語：cadere, そこから cadenza.



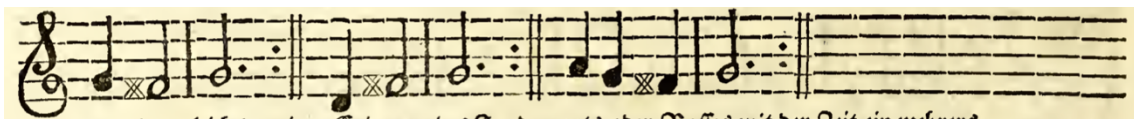
ここで A はカデンツ音 (Cadenz-Note)、G は終止音²⁹である。にもかかわらず一般的には「G におけるカデンツである」などという。私たちもこの習慣に従おう。

D.: しかし e と c も、落下するから、カデンツに含まれる。

P.: もちろん含まれるが、落下する音符としてではない。なぜならカデンツは他の作り方もある。例えば



不完全なカデンツ音は、言ってみれば「落上³⁰」するとさえ言える。



それについて、そして同時に根音 (Fundament) あるいは低音 (バス) のカデンツについてはまた時間があるときに詳しく述べる。

D.: ではさっそく第一部においても第二部においても三度のカデンツを持つメヌエットを試したい、例えば



P.: もうメヌエットをやめて、具体的な拍子の秩序という課題にもっと本気で取り組もう。

D.: もう少しの辛抱だ！私の師匠はかつて逆行のメヌエットを作った。それはどういう意味なのか分からない。

(15 頁)

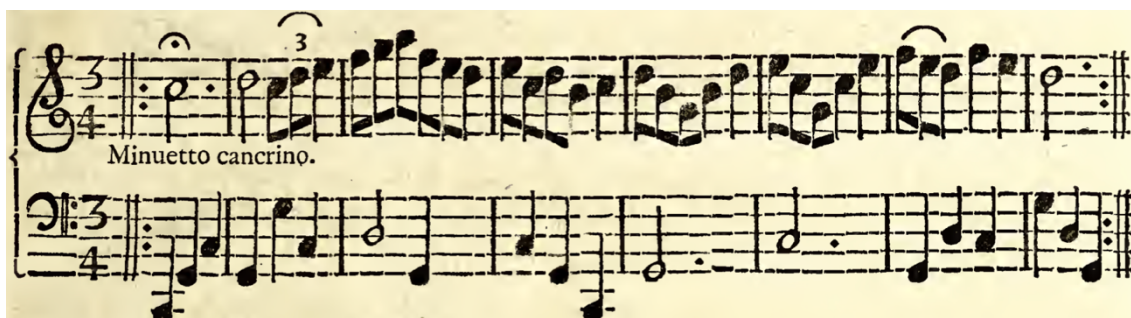
P.: その時に君の師匠はきっとまだ大分若かっただろう。なぜなら作曲においては全く別の、またより有益な課題がたくさんあるからだ。しかし君の好奇心を満たすために教えてあげよう。私の意見を言うなら、このようなメヌエットは、一文字ずつ後ろからでも読めるラテン語で韻文³¹（これもよくある

²⁹ 著者注 Nota finalis.

³⁰ 訳者注 原文でも自然に反する表現 (hinauffallen、普通は hinabfallen) が使われているのであえてそのまま「落上」(落下に対して) を使った。

³¹ 著者注 Carmina.

ものではない)を作る詩人を猿真似するに他ならない。ある作曲家にこのような韻文³²が送られて来たよ (私はちょうどそこに居合わせた)、約束を守るために。こんな風なメヌエットだ。

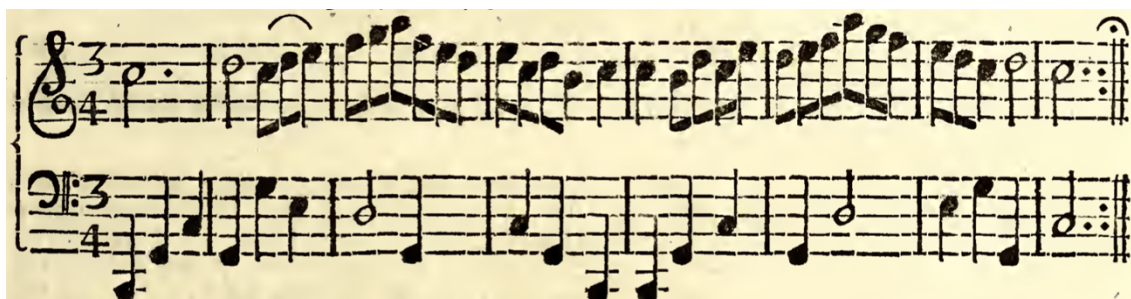


D.: それで第二部はどこに？

P.: 分からなかったか？繰り返しの後では両声部で後ろから初めて、一音一音戻って、そして先の者があとになり、あとの者が先になる³³だろう。カデンツが出だしに应用でき、出だしがカデンツになりうることさえ注意すれば、詩人が前述のような韻文一編を完成するよりも早く君がこのようなメヌエットを十曲でも作れる。例の印 \odot も応用して。

D.: この印をすでに分かってきた。しかしこのようになるまではまず低音(バス)についての章を読んで、理解しなければならないだろう。

P.: しかし前述の韻文をもっと正確に真似するなら、以下のようにならなければならない、例えば



そうすると無限の繰り返しになってしまうのだが。

D.: お願いだ、もう少し教えてほしい。作曲に関連するものは何でも知りたいので。

P.: 私もだ。低音とのイミテーションをまだ知らない場合は、このトリオを見てほしい、例えば

³² 著者注 Sano decisum sero res musice donas. (訳者注 ラテン語の回文で、「私は約束を繰り返す。君は音楽に遅くものを贈っている。」)

³³ 訳者注 ドイツ語では„werden die letzten die ersten, und die ersten die letzten seyn.“これは聖書からの引用 (マタイ 19:30) だと思われるので、直訳せず、日本語の聖書から引用することにした。



(16頁)

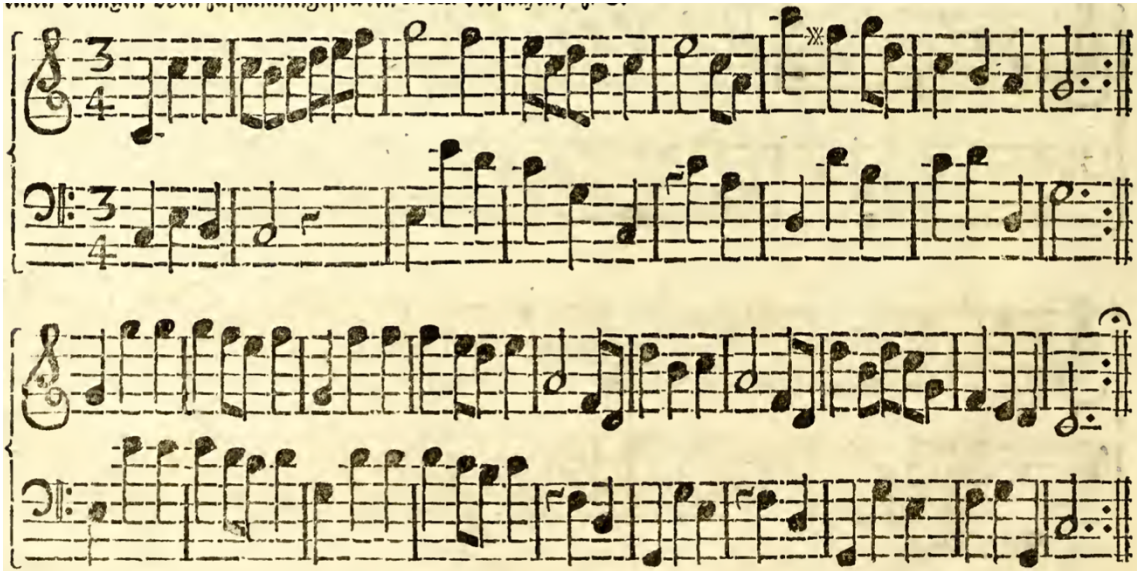
あるいはバスを四分音符二つ分だけ遅らせる。例



バスを四分音符四つあるいは五つ分遅れて入れることも可能だ、すなわち⊙。

- D.: 私の師匠もそんなことをやっている、しかし彼はそれをカノンと呼ぶ。
- P.: これは2声のものにしてはちょっと大げさな話だと思う。カノンはどういうものなのか、それは次回4声で示したい。ちなみに、この機会に子供じみた発明や珍奇なものを百ほど書き留めておこうと思ったが、そんな遊びにうつつを抜かしていたら、君の実力は伸びない。それよりはいつでも機会があれば今まで扱った事例について、いつも前もってあの⊙を考えて、数千曲のメヌエットを作ることに努めよ。
- D.: かならずやろう。しかしそろそろ少しだけでも、メヌエットに低音をどのように付け加えるかを知りたい。
- P.: またか？メヌエットの低音は他の曲の低音と変わらない、ただ生真面目であるより若ささがあらねばならない。
- D.: 若いとは、どういう意味か？

P: 覚えなよ。Tutti または多くの声部が参加する歌（vollstimmiger Gesang³⁴）には年配（alter³⁵）の、低い低音が必要で、Solo には大体においてはより高い低音、あたかも第二ヴァイオリンの代わりになっているように。メヌエットは一般的にただ一つのメロディー³⁶しかないの、それを Solo と見なすしかないだろう。低音が第二ヴァイオリンの代わりになる箇所は三度平行進行がところどころ避けられない。一言で言えば、この二つの声部は、同等になるために、いつもお互いに近い音域でなければならない。ただし低音の真面目な姿があまり損なわれない限りにおいてである。多くの八分音符のパッセージはそれに役立たない。それらは弾きにくいだけでなく、揚げる（Erheben）にも同じく無用だ。君の継ぎ接ぎのメヌエットに一つ試してみる、例えば



この低音は多くの[主旋律との]三度[平行進行]のせいで少し若すぎるかもしれない。このように高音部に入って聞こえやすく、そしていつもメロディー、すなわちヴァイオリンの傍にあるので、今日はこのような低音を作るのは大変普通だけれども、こういったことにいつも気をつけなければならない。**(17 頁)**なぜなら、古いものを敬っている多くの人は低音が C まで、稀には D までしか上がってはならないと主張するから。しかし低音について論じる際に証明したいのは、大多数のコントラバス奏者は法則上、時には F や G までも這い上がる義務があることだ。ところで、音楽においては絶えず運動³⁷を感じさせなければならない。つまり、一つまたは一部の声部が休む時に、他の声部が動かなければならない。このルールに多くの作曲家³⁸が違反する。ただこれについて細々に論じる時間がない。以下のメロディーと低音を注意深く見れば分かる。

³⁴ 訳者注 vollstimmig は一般的に和声が少なくとも 4 声で作られていることを指す用語。例えば 4 声の合唱曲など。協奏曲の Tutti もこれに属するだろう。

³⁵ 訳者注 ここで alt（「年齢の高い」、「古い」、「古代の」などの意味も持つ単語）を使っているのは趣旨が分かりにくい、役者の解釈では、男性の声が歳をとれば低くなるというところから、著者が alt を「歳をとった、すなわち音域が低くて重い」、それに対して jung を「若い、すなわち音域が高くて、軽い」という意味で使っている。

³⁶ 訳者注 ドイツ語では Stimme という単語が使われ、それはこの文脈で一般的に「声部」と訳す。しかし低音が付くという話なので、低音も「声部」なので、ここでは妥当な訳ではないと判断した。

³⁷ 著者注 Mobile perpetuum.

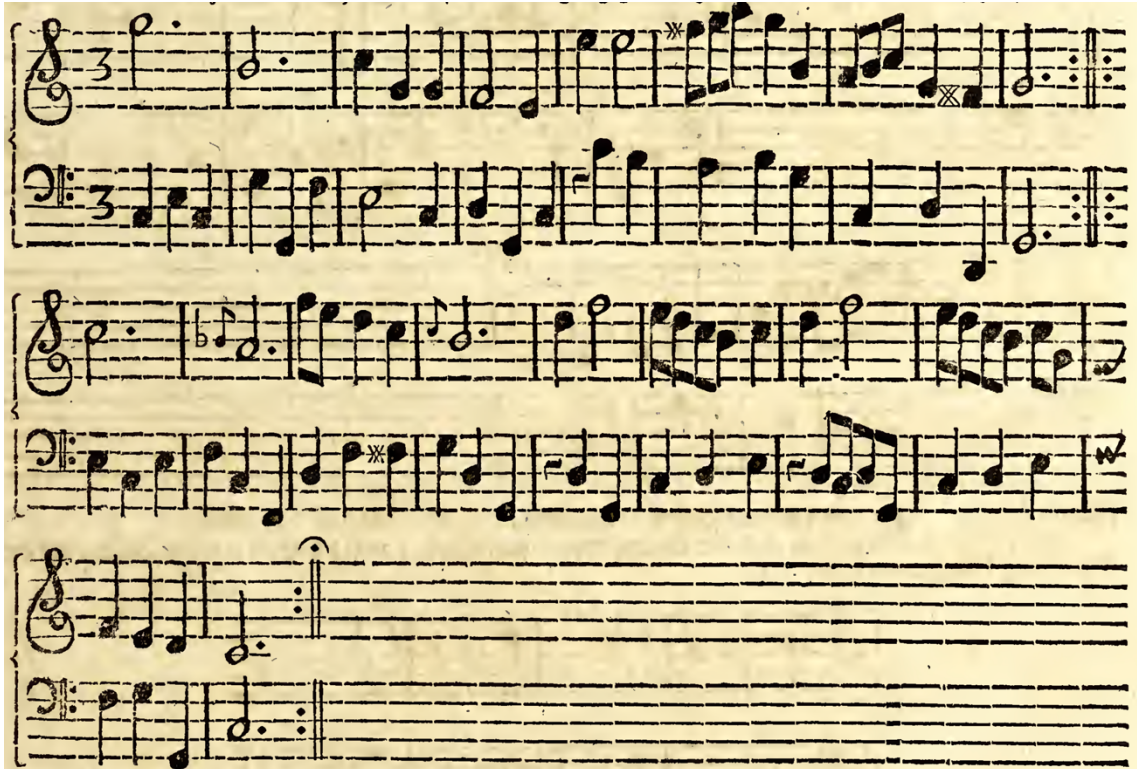
³⁸ 著者注 あるいはここでは「ソプラノ歌手」と書くべきだ。でなければ何人か髭を生やした殴り書き手の憎しみをかってしまう。（訳者注 「髭を生やした」とは年配の男、「殴り書き」とはよく考えずに

(八分音符の動き)



D.: 分かった。ヴァイオリンが一瞬でも休んだ時に、低音にはすぐ八分音符で動くか。またはその逆だ。

P.: ただメヌエットにおいては、バスは概ね四分音符のみで動きを作っている、例えば



D.: そうした方が良い。そのように低音が動かない音符を少し生かしている。

P.: しかし音楽においては趣味 (Geschmack³⁹) が第一なので、このルールを厳密に守らない方が良い場合もある。例えばさっきのメヌエットの反復クローズをここに挙げたい。このようには悪くないということはあるだろう。

作曲することを指している。ここでは時代について行っていないにもかかわらず多くの作品を書き上げている作曲家のことを意味している。)

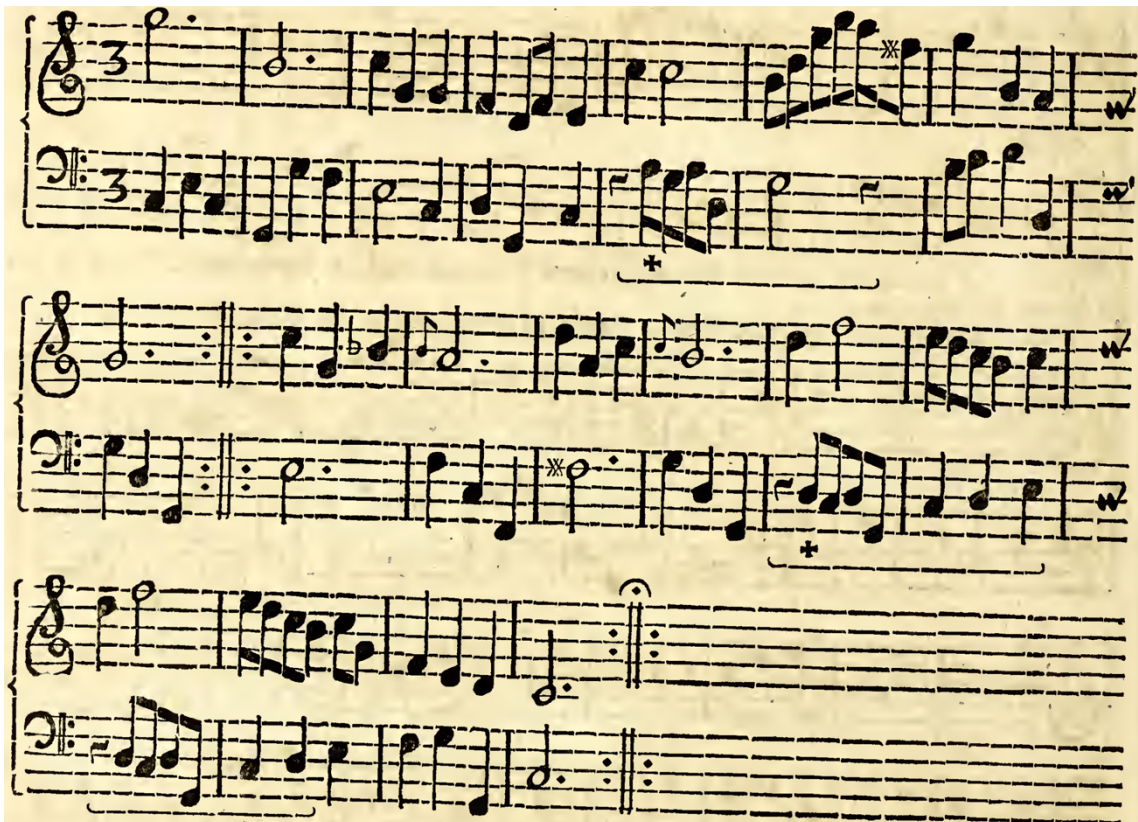
³⁹ 著者注 Gustus. (訳者注 18世紀の美学ではフランスの宮廷文化からの影響が強く、ドイツ語の Geschmack がフランス語の goût の訳語として使われたと考えられる。日本語の美学書では「趣味」と訳されるのが多いので、ここでこの訳語を採用した。goût の語源はラテン語の gustus である。)



そして⊙、つまりありとあらゆる方法で。

(18頁)

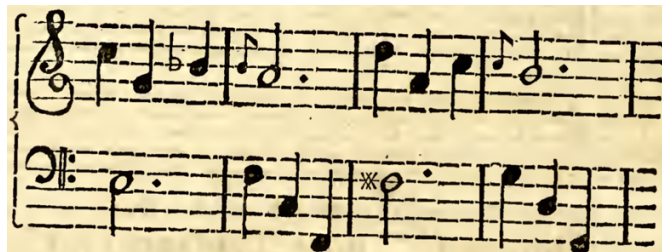
- D.: このありとあらゆるというのは言うまでもない。やあ、果たして本当だろうか。私の師匠がどこかで聞いた話だとこの間言っていたが、「ヴィオラの旋律も、内声として和声を補う役割を果たしているだけに、それとして独自に流れるカンタービレを持たなければならない」と。上のメロディーあるいは外声がどんな動きをしても。
- P.: 君の師匠は正しい。ヴィオラがよく整えられスムーズに進行しないと役にたつより障害になる可能性がある。
- D.: そして「低音もまた別の、一層広大なカンタービレを持たなければならない」と、続けて言っていた。そうすると低音にも可愛らしい反復クローズを使えるのではないか。
- P.: その通りだ。先ほどのメヌエットを見よ、例えば



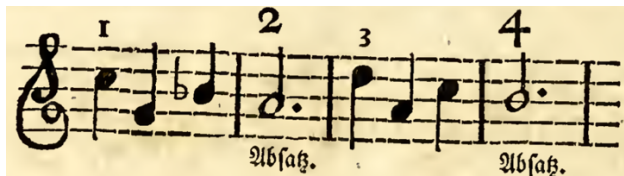
そして、こういうクローズではヴィオラ (Bratsche⁴⁰) を低音とユニゾンで弾かせるのが良い。

⁴⁰ 著者注 Viola di braccio, 腕 (著者注 Braccio, ラテン語 brachium, 腕) または手のヴィオール。それに対して Viola di gamba は足または脚のヴィオール。Bratsche のことをヴィオラ、アルトヴィオラな

D: この例では後半の冒頭部も気に入っている、低音とヴァイオリンが交代しているから。



P: 間違いない。しかし別の観点から、この進行は平凡過ぎて、あまり役に立たない。よく注意せよ！その2小節目を句切り (Absatz⁴¹) と呼ぶのだ、また第4小節目も同様に。

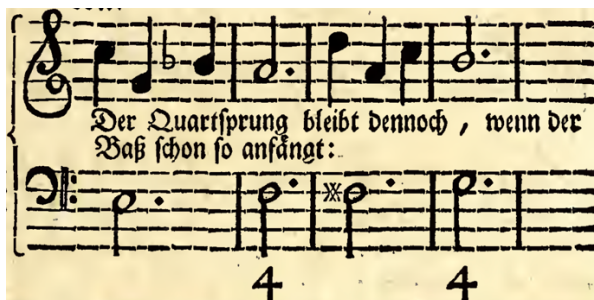


(19頁)

これに付く低音はいつも (根音から計算して) 四度跳躍で進行する、例えば



または



(低音がこのように始まっても四度跳躍であるのには変わりがない)

どとも書く、あるいは今日は主にその縮小形ヴィオレッタを使う。なぜなら昔の大きくて未熟な楽器より今日のものの方が小さく作られるから。

⁴¹ 著者注 Comma; 文章を読み上げる時の読点と同様に。ただし Comma という単語は音楽の比率の計算で別の意味を持つ。全ての作曲の法則を学んでから、神さえ許せば、私はそれについて私の考えを明らかにしたいと思っている。(訳者注 音程では 80:81 や 524288:531441 という、微妙な音高の違いを指す周波数の比率を Comma と呼ぶ)

このような二つの句切りはいちどきに出てくるものだ、まるでだれもが知っているあの古い小歌曲の第二部にあるように⁴²



だから多くの人に（謹んで）靴屋の切張り（Schusterfleck）と呼ばれる。初心者には役立つし、それ以外のメロディーの作り方を知らないから。

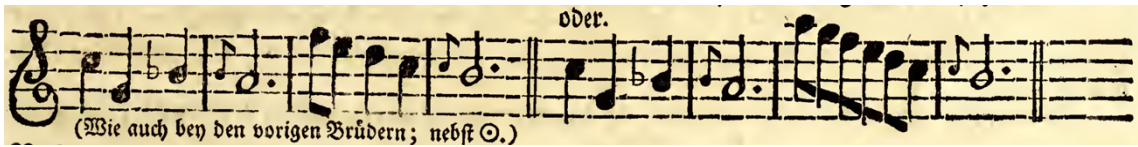
D.: それならこんな風に作ればよいかまもしれない



P.: それらはすべて同腹の兄弟だ、従って一寸も良くなっていない。

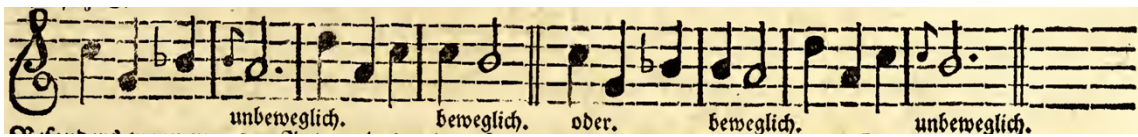
D.: ではどうすれば良いのか？

P.: ただ後の 2 小節句を少し変えれば良い、例えば

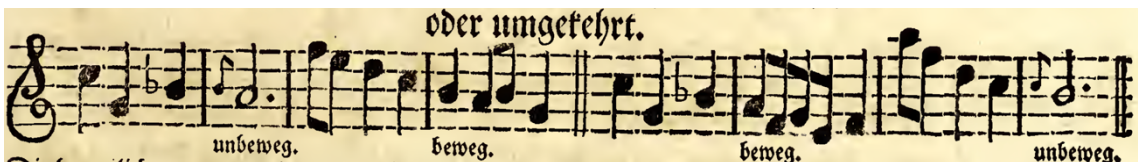


(Wie auch bey den vorigen Brüdern; nebst ⊙.)
(他の兄弟でも同様に、そして ⊙)

さらに良いのは、前者の句切りを不動、後者を可動にすることだ。またはその逆、例えば



特に後者の句切りの出だしも同時に変更する場合



可動なものをまた終止しないものと終止するものに分類できる。終止しないものは⁴³

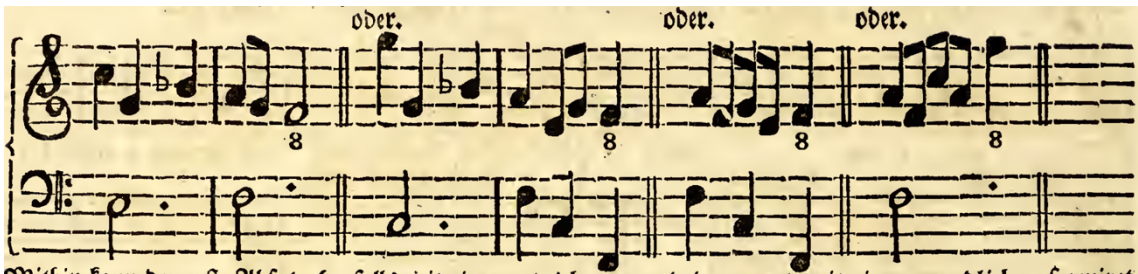
⁴² 訳者注 次の譜例は四分の四拍子に書かれているように見えるが、18世紀の習慣としてこれは四分の二拍子で、一部の小節線を省略した事例である。20頁の5番目の譜例ではその説明がはっきりと付け加えられている。

⁴³ 著者注 低音とオクターヴ関係である終了音ではなくその三度上に到達するもの。

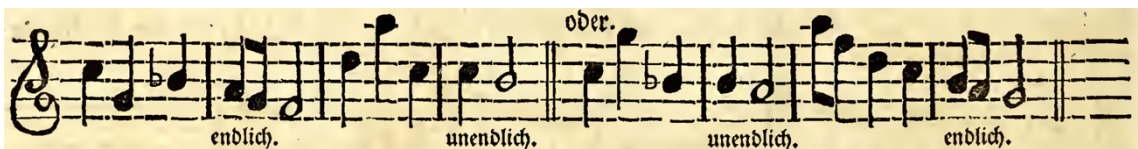


(20 頁)

それに対して終止するものは⁴⁴



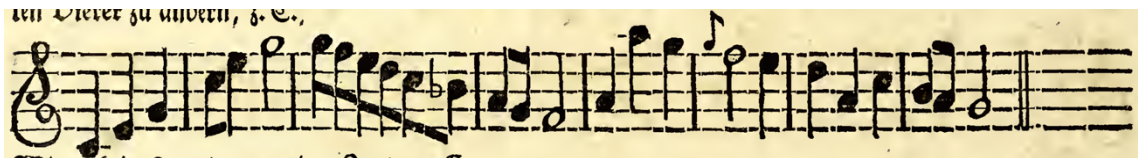
それをもって前者の切れ目を終止するもの、後者を終止しないものにすることができる、またはその逆、例えば



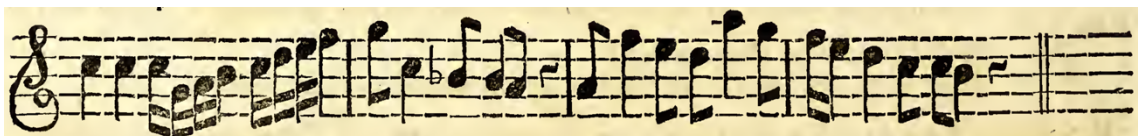
そして終止する、終止しない、可動、不動を見ると、君はあの⊙を何度も回すことができる。より長い、すなわち 3 小節または 4 小節から構成される句はあの歌とそれほど似ていないので、許される。例えば



最悪なのは、これらも平凡すぎるように思う者がいることだ。なぜなら彼らはこの場合も後の 4 小節句を変更することになっている。例えば



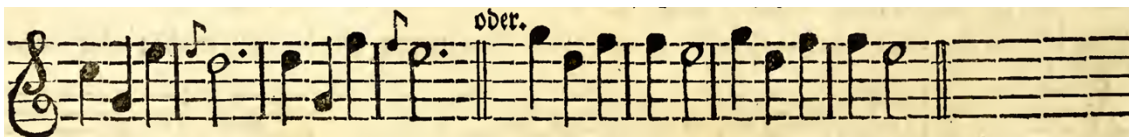
また四分の二拍子、あるいは平凡な拍子でも、例えば



そしてそれを終止する、終止しない、可動、不動、⊙を通して、どのようにでも、いつでも。

⁴⁴ 著者注 オクターヴという終了音に到達するもの。

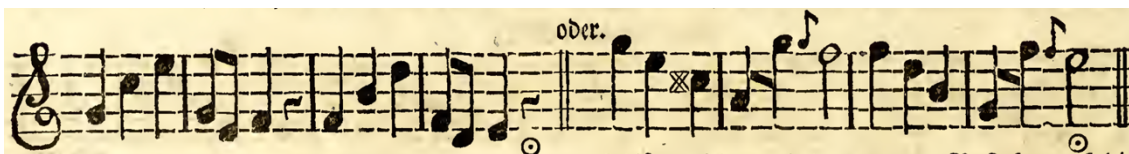
D.: これは想像できる。しかし次のような区切りも却下すべきものだろうか。



P.: いや、なぜ低音の四度跳躍に注意しなかったのか？

D.: やめろ、今分かった。

P.: そして段階的に下降する句もまた良いということも、君は認めるだろう。例えば



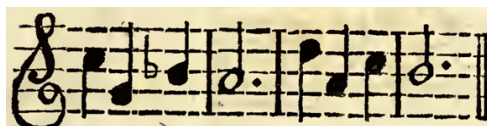
D.: しかし以下のようなアリアを見た覚えがある。そこには低音がやはりあの四度跳躍で進行している。



(21 頁)

P.: これらは句切りというより継続するメロディーなので、とても良いものだ。

D.: では私の区切りから



4 小節句を作っても良かったらどうか、例えば



P.: もちろん。そしてまた ⊙ をもって。

D.: しかし今は一つ思い出した。失礼かもしれないが、君は少し混乱しているようだ。君は（まだ若い時だったかもしれないが）メヌエットを作っていたよね。その中の一つを私は見たが、それにはあのような二つの区切りがあった ⊕。これを覚えている、見よ。



P.: これは違うと思う。強制されなければ、私は若い時もメヌエットを作ることを恥ずかしいものとして避けていた。そしてもし私が作ったとしても、この第二ヴァイオリンを付けていなかった筈だ、なぜなら、それがメヌエットにおいてのみならず全ての作品においてトレブルまたは外声、すなわち、第一ヴァイオリンの明瞭さを損ねるだけの可能性があるから。周知の通り、聞き手が複雑な構造を解くことを嫌い、ただ一つの外声の主声部のみに注意するのを好むからである。他の声部は、このメロディーを支えたり強化したりすべきで、それに惑わされてはならない。これは亡くなられた多くの作曲家が理解していないところだ、彼らはすべてをゴタ混ぜ（Kraut und Rüben）のもので埋めるのだ。

(22頁)

D.: これを聞いて良かった。ちなみに私は第一部では第二ヴァイオリンを例えばこのように作るべきだと思っていた。



- P.: これも間違いではない。私が気に入っているかどうかは、君には関係ない。このように作曲しなければならぬ、他の作り方がだめだとか、そのような考え方を絶対にしないでほしい⁴⁵。
- D.: そう思う。なぜなら、私は優れた作曲家による三声、あるいは四声で作られている非常に美しいメヌエットを聴いたことがある。その後私の師匠がこのメヌエットを聴いて、次のように言った。「あの新米の荒武者は禁じられたオクターヴを避けることさえ分からないのに、今日の墮落した趣味にがむしやらに従おうとしている。最近音楽はフォルテとピアノによって銅銭⁴⁶よりも薄くなってしまふ。この子は想像しなければならない、ドゥカート⁴⁷があゝの時代にどんなに重要だったか、大きくて見える音符しか使われていない時代に。ああ、本当に！彼らは全てを細かな削片に分割し、見ると視力を失うほどだ。もし正気なら技術を磨こうとするにもかかわらず！」
- P.: 君の師匠はちょっと言い過ぎている。なぜならピアノとフォルテは新しい発明ではない筈だから。音楽においてそれが絵画の光と陰に相当するものだから。しかしあの殴り書き手⁴⁸がメヌエットの第二部で二つの靴屋の切張り句の後の反復クローズで低音を第二ヴァイオリンによって強めたこのについて（これは君の師匠が指摘したことだ）、つまり



私はこの作曲家を裁かない、注意：もし彼がそれをよく考えてそうしたならば！なぜならそれらは禁じられたオクターヴではなく、全ての今日の大家にユニゾン（Einklang⁴⁹）に過ぎないものと見なされているからである。数分前⁵⁰に君に言っただろう、低音に独自のクローズまたは特殊なメロディーがある場合には、ヴィオラもこのように低音とユニゾンにするのが可能だと。しかしこのようなヴィオラによる低音の強調の優れた効果は君の師匠はもはや想像することができないだろう。ドゥカートの

⁴⁵ 著者注 例外のない規則はない。（この注の原文はラテン語）

⁴⁶ 訳者注 原文は kupfern Heller。ヘラーは小銭の最小の単位なので、非常に薄いものの例え。

⁴⁷ 訳者注 Ducaten は重くて高価の金のコイン。

⁴⁸ 訳者注 21 頁に載っている 3 声のメヌエットを作曲した人を指す。

⁴⁹ 著者注 Unisonus.

⁵⁰ 訳者注 原文は vor einer halben viertel Stunde（半分の四半時間前）、正確に計算して 7.5 分前のこと。

刻みも彼は元に戻せないだろう、彼の利欲がどんなに強くても。ちなみに技術を磨かなければならぬということ、彼は正しいことを言っている。聴衆に喜びや悲しみを呼び出す能力を育てる目的で。そうでなければ、技術は技術ではなく、単に空虚な屁理屈になる、200年前の詩が言うように

音楽は耳によって、絵画は目によって、

料理人は味覚によって常に敬愛される。

しかし（注意！）後者の三つ⁵¹が敏感でなければ

前者の三つ⁵²には、一銭（Heller）の価値もない。

もう一つ言えば、今日の楽譜は君の師匠には若すぎる、そして君の師匠は今日の楽譜には年をとり過ぎていて。そして、今日はちょっと遅く始めたから、一番良いものは明日にしよう。

D.: そして私も今になって気がついた、頭を使うとどんなに腹が減るのか。私の師匠はきっと喜ぶ。明日朝はまた早く来よう。では、さようなら！

⁵¹ 訳者注 耳、目、味覚。

⁵² 訳者注 音楽、絵画、料理人。